

〈資 料〉

リアリズムをどうとらえるか

——リチャード・リトルへのインタビュー——

樋野 芳雄

本1992年春、イギリスに滞在した折り、一日私はランカスター大学を訪れ、国際政治学者リチャード・リトル(Richard Little)博士にインタビューする機会を得た。

同氏は現代イギリスのアカデミックな国際政治理論の中堅指導者のひとりとして知られ、1990年以来イギリス国際政治学会(The British International Studies Association)機関誌 *Review of International Studies* のエディターを務めている。私にはかねて、国際政治理論の分野における近年のリアリズム論・リアリズム批判の根底にある考え方をめぐって、主立った理論家たちに直接質してみたいことがいくつかあった。博士もまた、我が意中の人であった。

博士は2、3日後に投函しなければならないという論文を執筆中で、ちょうどワープロに向かおうとされていたところであったにもかかわらず、突然の訪問者をにこやかに迎えてくださり、質問にも快く答えてくださった。感謝のほかはない。私にとってはよく話の通じる、楽しい会話だった。やりとりは短時間のものにならざるをえなかったが、ためにかえっていささか素朴とも言える問を単刀直入に発することができ、通常の論文や著書には必ずしもストレートには現れない肉声に触れえたように思う。録音テープの音声を文字にして、ここに記録しておきたい。なお、注記説明の必要を感じる部分もないではないが、小編としてはおおげさに過ぎるので、私の別の文章を参照していただくこととし、今回は省略する。

*

研究室に足を向ける前に、私は大学事務局で、同大学大学院全体のガイドブックと、政治学・国際関係論研究科 (Department of Politics and International Relations) の内容紹介パンフレットを分けてもらった。関係部分を参考資料 1・2 として末尾に掲げる (237 - 239 頁)。これによると、博士は、国際関係論・戦略研究の M. A. プログラム・ディレクターの任にあり、担当する「国際関係理論 1」「国際関係理論 2」は、このコースの必修科目になっている (他のプログラムの学生も履修することができる)。学生に、研究に当たっての最も基本的なパースペクティブを与える役割を担っている科目と思われる。見られるとおり、この科目の組立において、博士は、国際関係理論 (の系譜) をリアリズムと修正主義との 2 つに大別している。まずはこの点から、質問を始めた。

——大学院の講義紹介書を拝見すると、ご自分の講義を 2 つのモジュールから構成されていますね。

リトル ええ、リアリズムの伝統と修正主義の伝統です。

——後者を修正主義の伝統と命名されているのですね。

リトル はい。最初はアイディアリズムと呼ぼうかと思っていたのですが、実際にはそれ以上のものを含めたかったです。

第 1 のモジュールでするのは、リアリズムの思考の進化の跡を追うことです。第 2 のモジュールでは、国際関係におけるリアリズムの思考に対する主要な代案 (alternatives) を見ます。こちらは構造化という点ではずっとルースなモジュールです。最初にカー (E. H. Carr) を取り上げます。彼はリアリズム・アイディアリズムの区分を超越した人物です。それからミトラニー (David Mitrany) の *A Working Peace System*, 社会主義の立場に立つものとしてウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) を取り上げ、さらにポストモダニズムの立場、例えばアシュレイ (Richard K. Ashley) やシャピロ (Michael J. Shapiro) のような人を取り上げます。

したがって、事実上、これまでリアリズムにどのように攻撃が加えられてきたか、その様々な方法を次々と辿ってみることになります。リアリズムはその中心にあるのです。第2のモジュールは様々な角度から、リアリズムに向かって行くわけです。このコースはこうした構造を持っています。

——第2のモジュールは、通常アイディアリストと呼ばれている人々と、グローバリストと呼ばれている人々を含むわけですね。

リトル そうですね、実際のところ、例えばリチャード・フォーク (Richard Falk) の文献は全く取り上げていません。数週間のうちに何もかも詰め込むことはできませんので。そのかわりミトラニーを使って、例えばウォーラステインのように単に現在や過去についての異なった (alternative) 解釈を提出しようとするだけでなく、異なった未来、ものごとの違った見方を提示しようとしている作家たちもいるのだということを示唆したいと思っているのです。ミトラニーを通してそのことをとらえたいのです。

2つのモジュールで実際に行うのは、毎週学生と一緒に重要なテキスト、多様なテキストを読むことです。テキストはこの学問の進化の観点から多様なものにしてあるわけです。望むらくは、2つの学期が終わった時点で、学生たちがこの学問がどのように展開してきたのかについて妥当な感触を得、この学問のうちに存する広範な観点を我がものとしてくれることです。

——リアリズム学派のテキストとしてはどのようなものを使われているのですか。

リトル ここでもかなり広範なテキストを用いています。最初はリアリズムの父と見なされているトゥーキュディデース。学生に与えるリーディングのバックの中にトゥーキュディデースの多くの重要な議論を入れてあります。そして、当然、モーゲンソー (Hans J. Morgenthau)。ロバート・タッカー (Robert W. Tucker) の *The Inequality of Nations* もです。クラウゼヴィッツを取り上げようかと思うこともありますが、実際には使わず、シェリング (Thomas Schelling) の『紛争の戦略』を見ます。さらに、もちろんウォールツ (Kenneth N. Waltz)。そしてテラー (A. J. P.

Taylor) の『第二次世界大戦の原因』を取り上げます。これは、ひとつには歴史学の方法の特質、そしてそれと社会科学の方法との関連をいささか議論する機会を学生に与えるためです。それから、リアリズムについてのイギリスの見方とアメリカの見方とを対比させる入門的なセッションを行います。マーティン・ワイト (Martin Wight)、ヘドリー・ブル (Hedley Bull) をアメリカ学派と対比させるのです。

これら重要なテキストを精査することによって、リアリズムは通常考えられているよりももっとずっと複雑で、おそらくは矛盾をはらんだ思想学派なのだという像が描ければと思っています。先週の終わり、私は *International Studies Quarterly* 誌に載ったボブ・ウォーカー (R. B. J. Walker) のリアリズムに関する論文* を取り上げました。彼によれば、リアリズムは様々な思想学派の闘争の場なのです。様々な学派が集まる結節点なのです。とりわけ構造主義と歴史主義の結節点なのです。

* 次の論文のことと思われる。R. B. J. Walker, "Realism, Change, and International Political Theory," *International Studies Quarterly*, Vol. 31, No. 1 (March, 1987): 65-86.

——リアリズム・修正主義論争に対しては、基本的にどのような立場を取っておられるのですか。

リトル 今も言いましたように、私のひとつの主張は、リアリズムは実際にはしばしば考えられているよりもずっと広い、いろいろなものを包み込んでいる (encompassing) 立場だということです。ですから、むき出しの Realpolitik 的見方に立つような議論にはあまり興味がありません。

リアリズムの伝統は一方でモーゲンソーを含んでいます。私の見るところ、モーゲンソーは本質的に反実証主義者で、国際政治を理解するのに本質的に解釈学的手法を用います。これが一方の極端です。他方ウォールツはもう一方のハードラインに立って、分析に当たって構造論的アプローチを取ります。彼は、国際政治がどのように作動するのかを理解する上で、

リアリズムほどよい手がかりとなるものはほかにないという立場を鼓吹しているように思えます。

しかし、カーの議論を取ってみると、彼は、リアリズムはものごとがどのように作動しているかは語ってくれるが、現状に取って代わる世界がどんなものであるかは語ってくれないというのです。したがって、ほとんどすべての問題に関して、我々はリアリズムとユートピアニズムの双方の立場を必要とするのであり、それによって国際政治への完全なアプローチといったようなものを獲得できるのだということになります。単純にリアリズムのアプローチだけを取ることはできないと私は思います。

——カーは実際には単にリアリズムを提唱したのではなくて、リアリズムとユートピアニズムの総合を唱えたのでしたね。

リトル そうです。ですから私は修正主義をカーから始めるのです。彼はしばしば単純なリアリストであったと解釈されていますが、実際にはそれは『危機の二十年』の誤読です。おっしゃるように、両者の総合が必要なのです。もっとも、いかにしてあなたが総合を達成されるのかは、私にはよく分かりませんが(微笑)、いずれにせよ、総合が必要なことは確かです。

——モーゲンソーもしばしば誤って解釈されていると思います。多くの著作家は彼の本(*Politics among Nations*)の最初の部分を引いてモーゲンソーについて語ります。しかし、彼の本は全体として一種の弁証法的構造を持っています。

リトル こう言ってよいと思います。カーとモーゲンソーは大変よく似た立場に立っているのです。モーゲンソーはカーの本に対して批判的ではありましたが、モーゲンソーもまた、リアリズムは十分ではないということを示したいと思っていたのです。彼の世界政府論に立ち入っていくと、彼は方向づけを変える用意があるように見えてきます。実際、彼のリアリズムの概念だけを見ても、彼はパワーポリティックスと道義の間には緊張関係があると明瞭に論じています。道義はある意味で国際政治のいかなる分析にとっても不可欠な部分をなしているのだということは隠すわけにはい

きません。

したがって私は、学生に課題として、モーゲンソーには倒れるまでやまないパワーポリティックスが確かにあるが、法と道義に関する彼の考え方を理解する必要があると言います。それは純粋なパワーポリティックスの問題ではないのです。

——彼は元来は法学者だったわけですね。

リトル そうです。今、*Review of International Studies* の編集をしています。ある若いアメリカ人の送ってきた論文が、モーゲンソーの初期の思考とリアリストとしての中心的訓練を詳細に検討し、20年代の法学におけるいくつかの議論の影響を検討していました。この論文、最終的にはアクセプトしませんでした。

——以前、別の学者が、やはり初期モーゲンソーについて論文を書いていましたね。

リトル ええ、*Cooperation and Conflict* 誌に載ったアムストルプ (Niels Amstrup) の論文* ですね。この若いアメリカ人はその論文のことを知りませんでした (笑)。

* Niels Amstrup, "The 'Early' Morgenthau. A Comment on the Intellectual Origins of Realism," *Cooperation and Conflict*, Vol. 13 (1978): 163-175.

——私は元来政治社会学の出身なのですが、国際関係理論に大変興味を持っています。

リトル それは面白いですね。政治社会学から国際関係理論にどのように移ってきたのですか。

——政治社会学といっても、戦後日本の平和・安全保障問題のそれなのです。

リトル なるほど、両者は密接につながっていますね。

——日本でも平和・安全保障問題について厳しい論争があります。リアリズムを唱える人々は自らリアリストを称しますが、リアリストが

アイディアリストと呼ぶ人たちは自らアイディアリストとは称しません。

リトル もちろんそうでしょう（笑い）。

——自らをリアリストと称し、論敵をアイディアリストと呼ぶのは戦術的なネーミングなのですね。戦後日本のこの問題に関する議論の構造が現在の国際関係理論の論争の構造によく似ていると思うのです。

リトル この点に関する小さな本があります。おっしゃるとおりで、アイディアリズムには一種侮蔑的な語感（a pejorative feeling）が伴いますからね。それゆえにモーゲンソーはアイディアリズムという語を使ったのです。カーは同じ理由からユートピアニズムという語を使ったのだと思います。

——最近はどんな仕事をされているのですか。

リトル 共著でウォールツについての3部構成の本を書きました。第1部でバリー・ブーザン（Barry Buzan）がウォールツの本を詳細に検討して、取り扱いうる対象に関して、そこにはいくつかの重大な弱点があることを指摘しています。その議論には調整が必要である理由、より広い概念体系を取るべき理由を論じました。例えば、ラギー（John Gerard Ruggie）がシステムの「動的密度」と呼んだものや、コミュニケーションの増大といったことにウォールツはその概念を適合させることができませんでした。

私の担当部分では、私は社会学の若干のアイディア、特にギデンズ（Anthony Giddens）の著作に見られる「構造化」の考え方を応用しようと試みました。私もウォールツの理論的定式化の弱点を論じました。その定式化は、ウォールツ流に、暗黙のうちに一種の構造化アプローチのうちにあるのです。私はそれを取り出して、ローマ帝国興亡論に適用したのです。これは構造論者にとっては難しい事例であり続けてきました。しかし修正を施せば、その展開は説明可能になるのです。

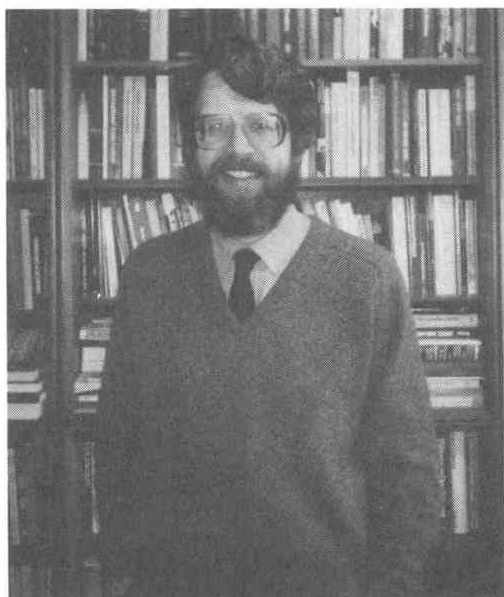
第3部では、チャールズ・ジョーンズ（Charles Jones）がウォールツ理

論の認識論的な含意を検討しました。ウォールツは通常実証主義者と見なされているけれども、多分プラグマティストと言う方が適当だろうと彼は言います。ジョーンズはウォールツのアプローチ、市場の観念のメタファーに対して批判的で、メタファーによる思考はウォールツのような実証主義的観点からでは、きちんとはとらえられないとするのです。ジョーンズはこのメタファーによる思考の含意を、実証主義の立場を越えて前進させています。

大変面白い本になったと思っています。コロンビア大学出版会から、刊行の予定です。

——私もウォールツについて論文を書いたことがあります。まだ完結させていませんが。残念ながら(?)日本語です。ありがとうございました。

(1992年3月9日インタビュー)



リチャード・リトル博士(樋野撮影)

参考資料 1

5. THE M. A. IN INTERNATIONAL RELATIONS AND STRATEGIC STUDIES

Programme Director : Dr. Richard Little

Aims and Objectives of the Programme

The M. A. programme in International Relations and Strategic Studies is a broadly-based course of study intended for students who desire to gain a thorough grounding in the theory, structure and working of the modern international system. Students normally concentrate either on issues concerned with foreign policy and diplomacy, or on issues concerned with security and strategy. The wide range of options enables them to select a course of study adapted to their own particular needs and interests.

The programme has three principal objectives. The first is to provide all students with a basic grounding in the modern theory of international relations, and the different approaches that may be taken to the subject. The second is to enable them to gain a detailed knowledge of those aspects of international relations and strategic studies in which they wish to specialise. The third is to provide them with the conceptual, methodological and empirical background necessary to undertake research in the subject.

Programme Requirements

Students for the M. A. in International Relations and Strategic Studies are required to take the two following modules :

- 1) Theory of International Relations 1: The Realist Analysis in International Relations.
- 2) Theory of International Relations 2: The Revisionist Analysis in International Relations.

The other four modules may be selected from the full list in Section 10.

出所) *Lancaster University : Department of Politics and International Relations, Graduate Prospectus, 1992 / 93, p. 8.*

参考資料 2

10. M. A. COURSE MODULES

- 1) Theory of International Relations 1: The Realist Analysis in International Relations
- 2) Theory of International Relations 2: The Revisionist Analysis in International Relations

Tutor : Dr. R. Little

These two modules are compulsory for the M. A. in International Relations and Strategic Studies, but may be taken separately by students on other programmes. They examine the ideas used, by theorists and practitioners, to think about international relations. The realist analysis, examined in the first module, places power at the centre of analysis, and presupposes that conflict in an anarchic international system is inevitable. The revisionist analysis, examined in the second module, presupposes that human beings can improve the world in which they live, and create peace and harmony. Students examine a series of texts which illustrate the two perspectives.

出所) *ibid.*, p. 14.